



宇奈月温泉探訪 : 山岡順太郎の故地を訪ねて

著者	西村 航
雑誌名	阡陵 : 関西大学博物館彙報
巻	79
ページ	14-15
発行年	2019-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023780

宇奈月温泉探訪 —山岡順太郎の故地を訪ねて—

西 村 航

富山県黒部市の宇奈月温泉は1923（大正12）年に開湯した温泉地で、黒部川水系の電源開発を背景に形成された。筆者は本年春に宇奈月温泉を訪れ、ここに残る関西大学中興の祖・山岡順太郎の足跡を辿った。

宇奈月温泉と山岡順太郎

山岡順太郎は1866（慶応2）年に金沢で生まれた。茨城県吏、逓信省勤務を経て大阪商船株式会社に入社し、実業家としての手腕を磨くと1914（大正3）年には株式会社大阪鉄工所の社長に迎えられる。やがて1917（大正6）年、大阪商業会議所の第8代会頭に就任して名実ともに大阪財界の重鎮となった。

宇奈月との関わりは、彼が1919（大正8）年に設立し社長を務めた日本電力株式会社（以下「日電」）の事業に由来する。黒部峡谷ではすでに東洋アルミナム株式会社が電源開発を展開していたが、日電が1923（大正12）年に事業を引き継ぎ、電源開発と温泉街建設を担った。これにより山岡は黒部と深く関わることになる。



写真1 独楽荘（中央の人物が山岡順太郎）

なお山岡が関西大学の経営に加わったのは1920（大正9）年からであり、日電経営の時期と重なる。関西大学は1922（大正11）年総理事となった山岡の尽力により旧制大学への昇格、千里山への学舎移転を実現した。彼が「学理と実際の調和」などを説いて提唱した理念「学の実化」は、今日まで続く学是となっている。

独楽荘

さて、筆者はまず「独楽荘」の碑を訪れた。これは山岡が晩年に構えた別荘「独楽荘」敷地内に建立されたもので、裏には以下のように刻まれている。



写真2 独楽荘の碑

日本電力株式会社ハ山岡順太郎ノ創立ニ係リ専ラ中部日本ニ於ケル水力電気ノ開発ヲ使命トナス而シテ同社ノ有スル発電地点ハ富山岐阜両県ノ諸川ニ亘リ頗ル豊富ナリト雖黒部川ハ其尤ナルモノナリ大正拾参年壹月翁社長トシテ親シク之カ起工式ニ臨ミ此地水力無限ニシテ産業動力ノ宝庫タルト共ニ地形雄渾ニシテ心身涵養ノ神境タリトシ推賞措カス乃昭和貳年六月一墅ヲ建テ司馬温公ノ故事ニ因ミ名ケテ独楽荘トナス高瀨幽閑自ラ翁ノ風格ヲ偲ハシムルモノアリ茲ニ翁ト事業ヲ与ニシ其徳望ヲ敬仰スル者還暦ノ寿ヲ祝福スルノ機ニ於テ翁カ愛賞ノ地ニ碑石ヲ建立シ以テ記念ス

昭和参年九月拾八日

日本電力株式会社副社長 池尾芳蔵識

文中では、独楽荘の名が司馬温公の故事、すなわち北宋の司馬光（1019-1086年）「独楽園記」に由来すること、山岡を敬仰する人びとが碑を建てたことが記される。

1927（昭和2）年6月に落成した独楽荘は当初、現在の碑から北



写真3 独楽荘碑文

西に300メートル足らずの黒部川沿いに建てられていた。今日の「黒部・宇奈月温泉やまのは」付近にあたる。当時は鉄道沿線周辺だけでなく川沿いにも旅館が建設されていく時期であり、独楽荘の立地も黒部峡谷の明媚な眺望を求めて選定されたのだろう。鹿子木彦三郎の『山岡順太郎伝』(1929年)によれば敷地は「黒部の峡谷を俯視し、背には杉が轟々として生い茂」っていた。邸内に設けられた浴室には温泉が溢れ、溪声が届いたといい、腎臓病を患った晩年の山岡にとって良い静養の地だったことがうかがえる。

その後の具体的な経過は明らかでないが、1928(昭和3)年に山岡が亡くなると独楽荘は日電の寮、温泉旅館として利用された。1946(昭和21)年の大火で宇奈月温泉街の大部分が焼失した際は、類焼を免れ、町内から被害者15名を受け入れた。ただし独楽荘を囲んでいた木々が焼かれてしまい、1958(昭和33)年時点で建物がむき出しの状態にあったことが山岡没後30年の関係者追憶会で語られている(『故山岡順太郎翁追憶会の記』私家版)。

大火の後宇奈月温泉の再興が始まると順太郎の孫である康が経営者に就き、独楽荘を温泉旅館として活用し営業を始めた。『日本観光旅館連盟会員旅館案内』(旅館新聞社、1964年)では独楽荘が和室18室を備え、一般客75人、団体客90人を収容人数とする旅館として紹介されている。

廃業後、1976(昭和51)年10月に石碑のみ現在の場所に移され、記念碑として保存されるとともに周辺が「独楽園」として整備された。隣には日電の宇奈月事務所を復元した黒部川電気記念館が建ち(1987年開館)、温泉と電源開発の歩みに触れられる一帯となっている。



写真4 宇奈月神社

宇奈月神社

温泉街の南東部に位置する宇奈月神社には、山岡の揮毫、奉納による石柱が残る。大正末に温泉街が発展し人口増加するなかで、神社の創建は居住者の念願であり、在地企業の賛同のもと1927(昭和2)年10月2日に実現した。

石柱は創建時に奉納されたもので、山岡が号していた「独楽荘主人」の刻銘が残る。ここに、黒部川の電源開発と宇奈月温泉街建設を背負っていた日電社長としての、同地における山岡の位置づけが読み取れる。



図5 宇奈月神社の石柱

最後に地名である「宇奈月」と山岡との関係について触れておかねばならない。町の伝承によれば、開湯以前にあった「うなずき」の地名に字を当てたのが山岡と山田胖(黒薙から宇奈月への引湯を指揮した東洋アルミナム技師)である。ある晩、ふたりが湯のなかで温泉の名を相談した折、宇治や奈良に並ぶ観月の地にしたいという願いで「宇奈月」と名付けたのだという。

今回の宇奈月訪問は山岡の足跡の一端を辿ったものにすぎないが、これだけでも山岡の事績の重みがうかがえる。同時期に関西大学では大学昇格を実現させて学理と実際の調和を説き、また国内規模で電力需要の増加に応えんと務めた山岡は、卓識を備え時代の趨勢を見極めた俊傑であったといえよう。

写真出典

写真1 鹿子木彦三郎『山岡順太郎伝』
写真2～5 筆者撮影(2019年4月22日)

主要参考文献

『宇奈月町史』宇奈月町役場、1969年。
『追録 宇奈月町史 文化編』宇奈月町役場、1989年。

関西大学博物館 年史編纂室学芸員